

第55回 日文研フォーラム



涙の語り—平安朝文学の特質—

Narrating Tears : Discourse in Heian Literature



ツベタナ・クリステワ
Tzvetana Kristeva

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原 猛

● テーマ ●

涙の語り
—平安朝文学の特質—

Narrating Tears : Discourse in Heian Literature

● 発表者 ●

ツベタナ・クリステワ

Tzvetana Kristeva



発表者紹介

ツベタナ・クリステワ
ソフィア大学教授
Prof. Tzvetana Kristeva
Sofia University, Bulgaria

1954年ブルガリア生まれ。1978年ロシア・モスクワ大学卒業。1983年ソフィア大学博士号取得。1978年～1984年ソフィア大学非常勤講師。1980年～1981年東京大学留学。1984年～1985年ソフィア大学講師。1985年～1990年ソフィア大学助教授。1990年～現在ソフィア大学教授。1992年～1993年日文研客員教授。1994年4月より宮城学院女子大学教授。専門は日本文学史。

主な著書

- Po Sledite na chetkata. Yaponskata iiricheska proza X-XIV vek (『水茎の跡・日本の仮名文学(10-14世紀)』), Sofia University Press, 1994, 313pp.

主な論文

- “The Genji-intext in Towazu-gatari,” Contemporary European Writing on Japan, ed. by Yan Nish, England, Paul Norbury Publications, 1984, pp. 251-258
- “The Pattern of Signification in Taketori monogatari,” Japan Forum, ed. by John Chapman, Oxford Univ., vol. 3, 1990
- “A sleeve is not just a sleeve (in early Japan culture),” Semiotica, 97-3/4 (1993), pp. 297-314
- 「一人称の文学形式－日本の日記文学とヨーロッパに於ける自伝文学の伝統－」『日本研究』第9集、国際日本文化研究センター、1993年、pp. 27-53
- “the pillow hook: the pillow book as an ‘open work’,” Japan Review, No. 5, 1994, pp. 15-54
- 「とはず(なみだ)がたり」、『新物語研究 2』、有精堂、1994、pp. 389-414

涙の語り

―平安朝文学の特質について―

今日の私の話の出発点になったものは、十二年前に（一九八一年に）試みた『とはすがたり』のブルガリア語訳です。それは日本古典文学の最初の翻訳だったので、様々な読者の注意を引き、評論家達にはかっこうの話題を提供してきました。その時、日本古典文学の「現代的な響き」に驚きを感じた読者達は、新鮮な興味を示し、思いがけない所で面白さを発見することで、私に新しい研究テーマを提供してくださいました。それは、読者達を最もびっくりさせた「袖の涙」のことです。「昔の日本人はどうして絶え間なく涙を流していたのだろうか。色々とお化粧もしているはずなのに。それに、いくら濡れても濡れきれない、あの袖はタオルのような生地だったのだろうか。」というような質問が次々と寄せられてきたので、私の頭の中に疑問の種を植えました。専門家の目に当たり前に見える「袖の涙」の表現は、ただの誇張した比喻にすぎないのでしょうか。よく考えると、あまりに目の前にあるものは、最も見えにくいのかも知れません。

以上のような予想も出来なかった意見を聞かせてもらってからも、しばらくの

間「涙」の研究を遠慮しました。「涙は人間の弱みの証である」という常識を持っている合理的な現代社会に育てられてきたからでしょう。しかし、私の現実から追い出された「袖の涙」は、今度は私の夢に入り込み、「わが袖の涙言問へほととぎす かかる思ひの 有明の空」という『とはすがたり』の歌の言葉を借りながら、「わが袖の涙言問へ、わが袖の涙言問へ」と、無意識のレベルから意識のレベルへと浸透してきました。

私達は忙しい現在に生きながら、現在にふさわしい色々な新しい知識を得ましたが、失ってしまったことも少なくはないでしょう。いわゆる近代化に伴う合理的な価値観に基づいて、現代人が古代人よりも頭がよくなってきたと言われているかもしれませんが、それは本当なのでしょうか。人類学者は様々な文化を研究した上で、文化を持つ人間の頭の能力の範囲が時代的にも地域的にもあまり変わらないということを主張してきました。変わるのは、その内容だけです。たとえば、昔の人は自然との密接な関係を持ち、四季と共に変わりゆく自然の彩りに心が引かれて、鳥や虫や草や木等の声を聞くことができたのです。一方、我々現代人は、そのような鋭い感覚を失ってきたのに対して、機械化された現代に生き残るため、

様々な「機械的」な知識を獲得しました。日常的な例として、車の運転が挙げられるかも知れません。ハンドルをにぎるドライバーは、周りの自然から目を離さない、事故にあうに違いないでしょう。これは常識です。現代社会にふさわしい常識です。しかし、現代人の優越感とは関係がないと思います。感覚的な知識と合理的な知識とではどっちが優れているかという質問が、無意味であるからです。それぞれの時代に、また、それぞれの文化パターンに、それぞれのふさわしい知識が必要であると言えます。

以上のようなことは当然に思われるかも知れませんが、必ずしもそうではないと思います。その理由は、いわゆる「近代化」にあるように考えられます。明治維新以来行われてきた「近代化」は、日本の社会における革命的な役割をはたしたのに対して、日本文化の研究を混乱させたと思います。つまり、西洋文化を中心とした「近代的」な価値観は、異なった伝統を持つ文化の面白さを見逃してきましたと思います。文明の多様化は、様々な「多様」他様から織り成されているからです。

文化研究の視点から日本の「近代化」を考えるたびに、古代ギリシャのプロクルステスの伝説を連想的に思い出します。プロクルステスという人物はおそろし

い強盗であり、ナイブな旅人を自分の家に誘いこんで、ひどい目に合わせたそうです。客を鉄の寝台に寝かせて、寝台より長い人の余った部分を切ったり、寝台より短い人の体を引き延ばしたりしながら、その寝台に「合わせた」そうです。異なった文化パターンを無理に「合わせる」ことも、どこかで「プロクルステスの寝台」に似ているのではないでしょうか。

一方、島国の日本人の文化が比較もできないほどユニークであるという、全く反対の説も、やはり、「鎖国時代」的な考え方に過ぎないと思います。どの文化もユニークでありながら、それらの差異の中で「普遍的な」要素を見つけることができるからです。

さて、振り子の極点のようにお互いを否定するその二つの研究傾向をどうやって調和できるのでしょうか。私には、研究の対象から出発する以外には方法がないと思えます。そして、現代人として得た様々の知識を研究の前提とするのではなく、異なった文化の面白さを顕示しうるための手段として使用しなければならぬと思います。

以上のような研究態度を踏まえて、平安文学の中に絶え間なく流れている「涙」

のことに少しばかり触れてみたいと思います。しかし、長い年月の寂しさのつれづれに考えてきたことなので、一時間どころか、何時間も何日間も話しても、「涙」の内容が尽くせないと思います。簡単なヒントしか申し上げられませんが、前もって皆さんのご了解をお願いしたいと思います。一方、平安朝文学の中でも、場合によって、直接に語られたことよりも、落とされたことの方が意味を持っていることもあります。それに応じて、今日の私の話の中では、述べたことよりも、述べなかったことの方が興味深いと考えて下されば、大変ありがたいと思います。

平安朝文学における「袖の涙」という表現を研究しはじめた時、極めて面白いことを発見しました。というのは、この表現が直接に出てくる例よりも、間接的で、「変身」して登場する例の方が驚くほど多いのです。当時の歌語として認められている様々の表現が「袖の涙」の種類として解釈されているからです。

『涙』には、露や時雨や雫や白玉等のような比喻が数多くありますし、『袖』も衣手や袂の類義語によって代表されます。更に付け加えますと、「袖の川」、「袖の海」、「袖の湊」という言葉に並んで、「袖を濡らす」、「袖を絞る」、「袖を乾かす」等の表現も、間接的に「袖の涙」を表しています。『涙』は表面に漏れなくても、

他の表現の裏に流れています。ところで、『袖の浦』という歌語は、もしかしたら、このような意味を私達に伝えようとしているのではないのでしょうか。つまり、「海の浦」と「衣の裏」という掛け詞が、隠されている「袖の涙」という意味の裏をウラギルのではないのでしょうか。

さて、第一のステップとして色々な辞典を引いてみましょう。日本では、専門的なものを含めて辞典の数が極めて多いことは、言葉の研究が進んでいる証拠でもあります。現在行われている文学等の研究にも大いに貢献していると思いません。

それにもかかわらず、「袖の涙」そのものが、小学館の『日本国語大辞典』（第十二巻）にしか出てきませんし、しかも、「衣の袖をぬらす涙」という部分的で簡単な説明にとどまっています。つまり、「袖の涙」は、一つの固定した表現として取り扱われていません。ただし、「袖の涙」の派生語として解釈されている表現は、どの辞典でもたくさん出てきます。古い言葉の最も詳しい辞典である角川の古語大辞典の第三巻に載っている例の中から五つばかりの説明を引用しましょう。

「袖の雨」—— 袖に涙が雨のように降りぬれること。

「袖の海」—— 涙が多く流れることや、それによってぬれた袖のたとえ。

「袖の時雨」—— 歌語。袖をぬらす涙の比喩。涙を袖にかかる時雨にたとえ

たもの。

「袖の露」—— 歌語。袖にかかる露。袖をぬらす涙の比喩に用いることが多

い。

「袖の湊」—— 歌語。涙があふれ流れて袖に注ぐことを、川水の流れ込む湊

にたとえた語。

更に遡ると、このような解釈は最も古い歌語である枕詞のレベルでも表わされてきますが、その場合は、「袖」のかわりに、「衣手」という古い言葉の方がよく使われています。その例の一つは、「衣手常陸の国」なのです。明治書院の和歌大辞典によると、「常陸風土記に『筑波岳に黒雲かかり衣手漬（ひたち）の国』という諺があり、ヒタチにヒツ（濡れる意）を類音によって連らねた」そうです。一方、「ころもでの」を真若の浦と名木の川とにかけた場合については、あいまいな解釈しか出てきません。すなわち、「いずれも即興的に衣・袖に縁のある語やそれと同音の地名にいいかけたものか。」ということなのです。それを讀んだ私は、大変刺激されました。「袖に縁のある語」である「涙」の研究を進めると、辞典で不明になっている枕詞の使用さえも説明できるかも知れないと思ったからです。少なくとも、

「泣きの川」とでも読まれる「名木の川」の場合は、その関係がはっきりと表れていると言えるでしょう。

「袖」と「涙」との間の縁の証拠を追求しながら、一層専門的な辞典である角川書店の『歌枕歌ことば辞典』に当たってみましたが、「袖」の記述の中では、まるで私の期待に答えてくれるかのように、次の通りの説明がありました。すなわち、

『「袖」によって連想されるものは、やはり『涙』である。「つれづれのながめにまさる涙川袖のみ濡れて逢ふよしもなし」(古今集・三恋・敏行)のように『涙』に『濡れ』、「契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山浪越さじとは」(後拾遺集・恋四・元輔、百人一首)のように『袖をしぼり』、「我ながら思ふか物をとばかりに袖にしぐる庭の松風」(新古今集・雑中・有家)のように『袖』が『時雨』に濡れそぼち、「ぬばたまの夜渡る月をおもしろみ吾が居る袖に露ぞおきにける」(万葉集・卷七)のように『時雨』や『露』が袖を濡らし、『袖の雫』(伊勢物語・七十五段)『袖の滝つせ』(新拾遺集・恋一)などにもたとえられたが、いっぽうそのように落ちる涙をとめるものとして『袖』を『しがらみ』として用いたり(拾遺集・恋四)もした。」(二三〇―二三〇頁)

さて、以上のように様々の辞典から引き出した情報をまとめてみましょう。

「袖の涙」という表現が直接にはほとんど取り扱われていないのにもかかわらず、「袖の涙」のたとえとして解釈された表現は極めて多いし、その大部分が歌語としても認められています。従って、「袖の涙」は、表面的で直接的な意味に限らず、他の歌語の意味を支えている表現であると言えるでしょう。もし「袖の露」、「袖の湊」、「袖を絞る」等々のような数多くの歌語が「袖の涙」のメタファーであるとすれば、「袖の涙」そのものが、詩的言語 (poetic language) のもっと深いレベルを象徴する根源的なメタファーであると言えるでしょう。つまり、「袖の涙」は、普通の隠喩とは違って、特定の内容を比喩的に伝えるだけではなく、詩的言語の働き方についての情報さえも伝えているという結論が導き出されると思います。

しかし、ことばの意味と意義を求めるためには、いくら辞典を引いても、やはり不十分であると思います。辞典に出てくる語彙の姿は写真の映像に似ていますが、ことばには、自然や人間と同じように、それ自身の命があります。少なくとも、それは「ことだま」を信じていた平安時代の人々の常識です。従って、こと

ば——特に詩的言語としてのことば——を理解するには、歌におけるそれらの生きた方を研究すべきでしょう。ですから、辞典に次いで第二のステップとして、平安文学の詩的言語の基準を明示した『古今集』と『新古今集』の中で「袖の涙」の跡を辿ってみたいと思います。

この二つの勅撰集に出てくる「袖の涙」の歌を数えてみましたが、『古今集』の全一一〇〇首の歌の内に約六〇の例があり、『新古今集』の全一九九〇首の歌の内に約一九〇の例がありました。数字を比較しながら、『新古今集』は「袖の涙」の歌がよく出てくることがわかりますが、それは私の説をバック・アップしているとも思います。つまり、詩的言語の基準が固定すればするほど、その働き方を象徴している「袖の涙」の表現も盛んに現れていきます。

歌題別から言えば、「袖の涙」は、当然なことに、恋の巻に集中しています。ただし、「涙」はその巻に留まらず、四季の歌や、離別の歌や、羈旅や、哀傷の歌等にもそぼちつつ、歌ことばの研究者にとって最も意義深く思われる「物名」の巻にも、漏れてきます。その例として、『古今集』の四二四と四二五の歌を挙げましょう。

波の打つ 瀬見れば玉ぞ 乱れける 拾はば袖に はかなからむや

(在原滋春)

袂より はなれて玉を 包まめや これなむそれと うつせ見むかし

(壬生忠岑)

この二つの歌の中では、はかない世の中を象徴する「うつせみ」という言葉だけではなく、はかなさを悲しむ涙の玉と、袖と袂との間の「縁」も隠されていると思います。

さて、絶え間なく流れてゆく涙の話をもっとくわしく聞いてみましょう。先ず、『古今集』から：

早き瀬に 海松布生ひせば わが袖の 涙の川に 植ゑましものを

(五三一、よみ人しらず)

しきたへの 枕の下に 海はあれど 人を海松布は生ひずぞありける

(五九五、紀友則)

この二つの歌は、言うまでもなく、片思いの悲しみを表しているけれども、「海松布」という言葉は、もっと深い意味をもたらしてきます。つまり、海草の名前に「見る目」という意味が重なっているので、「涙の海」に「みるめ」を植えると、

心の中に潜んでいる片思いが見えるようになるという解釈ができます。従って、この二つの歌については、「涙」が感情を表すだけではなく、その感情を語って伝えることもできるというような読み方もあります。

「涙」の伝達力に訴える歌が他にも沢山ありますが、もう一つだけを引用しましょう。

限りなく 思ふ涙に そぼちぬる 袖はかはかじ 逢はむ日までに

(四〇一、よみ人しらず)

『涙』が感情を語っているからこそ、それを隠そうとしても、黙りはしません。

包めども 袖にたまらぬ 白玉は 人を見ぬ目の 涙なりけり

(五五六、安倍清行)

この歌は、相手に自分の「涙」を見てもらいたい、自分の愛を語っている

『涙』を聞いてもらいたいというような意味も持っていると思ふことができます。しかし、いくら聞いてもらいたくても、聞いてもらえない場合もあるのです。

そのことも、やはり「涙」が教えてくれるのです。別れや失恋の知らせを届けてくれる「涙」の例として三首ばかりの歌を引用しましょう。

今日別れ 明日は近江(あふみ 逢ふ身)と おもへども 夜や更けぬらむ

袖の露けき

(三六九、紀利貞)

わが袖に　まだき時雨の　降りぬるは　君が心に秋（あき＝飽き）や来ぬら
む

(七六三、よみ人しらず)

つれづれの　ながめにまさる　涙川　袖のみぬれて　逢ふよしもなし

(六一七、藤原敏行)

『伊勢物語』にも出てくる三首目の歌は、極めて面白いと思います。「涙川袖のみぬれて」ということばが、「涙」には「袖」をぬらす以外にも意味があると示しているからです。それは、在原業平が詠んだ返し歌では更に明示されています。すなわち、

浅みこそ　袖はひつらめ　涙川　身さへなると　聞かばたのまむ

(古今、六一八)

付け加えますと、業平の歌は、「浅みこそ袖はひつらめ涙川」という言葉によって『袖の涙』の不変形表現としての基準を破壊しながら、間接的にその基準の存在を強調していると思います。

以上のように「涙」が心の思いを相手に語って伝えることができるからこそ、それが形見にもなりうるのです。「形見」としての「涙」の例を挙げましょう。

年を経て 消えぬ思ひは ありながら 夜の袂は なほこほりけり」

(五九六、紀友則)

飽かずして 別るる袖の 白玉は 君が形見と つつみてぞゆく

(四〇〇、よみ人しらず)

この歌が示しているように、『袖の涙』は反復力と伝達力を持ち、心のありさまを再表現できるのです。一方、形見として保存された思いが再表現できるからこそ、『涙』は「いつはりの涙」になったり、「おろかなる涙」にもなったりします。

いつはりの 涙なりせば 唐衣 忍びに袖は しばらくざらまし

(五七六、藤原忠房)

おろかなる 涙ぞ袖に 玉はなす 我は堰きあへず たぎつ瀬なれば

(五五七、小野小町)

以上の二つの歌は、「事実と虚構(そらごと)」という日記文学や物語等における中心なる問題にもかかわってきます。

『古今集』から『新古今集』へ移りますと、『袖の涙』のはたしている機能が一層明確に顕示されてきます。感情の表徴としての機能だけではなく、詩的言語の働き方を表現する「涙」の機能も見えてきます。

身にそへる 影とこそ見れ 秋の月 袖にうつらぬ をりしなれば

(四一〇、相模)

昔思ふ さ夜の寝覚めの 床さえて 涙もこぼる 袖の上かな

(六二九、守覚法親王)

この歌は、『涙』の反復力と伝達力を示しながら、昔を思う時、頼りになりうるものは『涙』しかないと強調しているのです。『涙』と「思い出」を合流させる歌は他にもたくさんありますが、二首ばかりを付けて加えましょう。

梅が香に 昔をとへば 春の月 こたへぬ影ぞ 袖にうつれる

(四五、藤原家鷹)

いとかくや 袖はしをれし 野べに出でて 昔も秋の 花は見しかど

(三四一、藤原俊成)

詩的言語の深層から漏れてくる『涙』は、「問はずに」流れて語りはじめます。

水ごもりの 沼の岩垣 つつめども いかなるひまに ぬるるたもとぞ

(一〇〇二、藤原高遠)

物思ふと いはぬばかりは 忍ぶとも いかかはすべき袖のしづくを

(一〇九二、源頭仲)

忍びあまり おつる涙を せきかへし おさふる袖よ うき名もらすな

(一一二二、よみ人しらず)

以上のように、『涙』が「問はずに」語りはじめるので、いくら抑えようとしても、抑えられません。今までそれを抑えてきた『袖』さえも「うき名をもらす」ようになるからです。一方、絶え間なく流れる「語る涙」をせきとめる「しがらみの袖」もだんだん狭くなっていきます。

払ひかね さこそは露の しげからめ 宿るか月の 袖のせばきに

(四三六、藤原雅経)

藤原雅経等の歌に登場してくる、この「せばき袖」という表現は、大変興味深いと思います。世界の衣服史の上で最も面積の広い平安朝の袖を「狭い」と呼ぶだことは、不思議に思わざるをえません。その理由は、直接的な意味ではなく、文化的な意味を持っているからに違いはありません。つまり、「袖のせばき」を嘆き悲しむ歌人達の声は、詩的言語における「袖」の機能を示しているように解釈

できると思います。

「袖」については、何回も（羽織を着て）発表したこともあり、様々の論文「A sleeve is not just a sleeve (in classical Japanese culture), *Semiotica*, 97(3/4), 1993、等」も書いたこともあります。いつか「袖」を通じて日本文化史を書いてみたいと思うほど、私は「袖」の重ね重ねに巻きこまれているようです。しかし、今日、皆さんをその重ねに巻き込むつもりはありませんので、ご安心下さい。ただ、「語る涙」を理解するには、「袖」の重ねも少しばかり開かねばならないと思います。

辞典を調べると、「せばき袖」については、「身分を表す」というような「狭い」解釈しか出てきません。身分を表すための袖の機能は、日本だけではなく、西洋文化においても出てきます。その例として、英国のビクトリア女王の肖像画等が挙げられますが、女王の袖よりも何倍も広い、平安朝の「袖」には、他の機能もあったに違いはありません。その機能を簡単に紹介しましょう。

まず、平安朝の衣は、言うまでもなく、実用的な機能をはたしていました。絹しか知らなかった当時の貴族にとっては、重ね重ねの衣が冬の寒さに耐えるための唯一の方法であったとともに、家具の少ないつめた床の上に寝る時の寝具で

もありました。「袖枕」という言葉は、以上のような実用的な機能を指摘していると思われず。

一方、寝具として使われた衣には、直接的でエロチックな意義も重なっていたと思われます。「袖を交はす」、「袖を継ぐ」、「袖を重ねる」等の表現は、男女関係のことも語っています。また、『和泉式部日記』の中では、「手枕の袖」は恋のシンボルになっています。

宮「時雨にも 露にもあてで 寝たる夜を あやしくぬるる 手枕の袖」

女「今朝の間に いまは消ぬらむ 夢ばかり ぬると見えつる 手枕の袖」

平安朝の袖には、エロチックな機能の上には、さらに美的な機能も重なっていました。重ね重ねの袖は、「色合わせ」の美も表現しましたし、「袖の香」という言葉が示しているように、香りのメッセージも伝えることができました。あるいは、比喩的に言えば、「袖口」は、人間の口の代わりに、人間についての様々の情報を話していました。

以上のように「情報チャンネル」であった「袖」は、当時の人によって積極的に使われていました。例えば、「鬼と女とは見えぬぞよき」という条件にに応じて、

屏風や几帳等の後ろで隠れていた女房達にとっては、「袖」が相手の目を引き寄せるための大事な手段でもありました。「押し出だし」と「出だし車」のような言葉が教えてくれるように、袖専用の「情報プログラム」さえもあったようです。つまり、手が届かない所までも「袖」が届いていたわけです。

ところで、体の続きとしての「袖」の意義は、最も古い「衣手」という言葉によって明示されているように思えます。その言葉には、「衣の手」だけではなく、「衣が手になる」という読みもありうるからです。

言葉の面白さから言えば、「袂」にも二重の意味が開かれてきます。つまり、本来的な「手元」を遊ばせると、「手が元である」、また「他の元である」というような連想も浮かんでくるのです。

いずれにしても、「袖」は、平安朝文化の価値観の中心である「色好み」と「みやび」を表示しながら、当時の文化情報伝達の重要なチャンネルであったに違いはありません。「袖の広さ」とは、寸法的な広さに限らず、「文化的な広さ」の意義も持っていたからこそ、「せばき袖」ということばは歌に登場しました。そのような「せばき袖」の内容には「言葉でも表せないほど感情に溢れている」というような「広い」解釈もありうると思います。

一方、前にも述べたように、「せばき袖」という表現は、密接的に「涙」と結びれています。「涙」が絶え間なく流れつつあるからこそ、「袖」は狭くなっています。言い換えれば、「袖」が単なる袖の機能を越えて、歌語的な「涙」の「溼」でもあったので、どんなに広くても、詩的言語の発展にもなっていて、だんだん「狭く」なっています。

以上のような関係の例として、「歌の心」の表徴でもある「涙川」の和歌を二首ばかり引用しましょう。

わが袖に ありけるものを 涙川 しばし止まれと 言はぬ契りに

(『とはすがたり』、巻四)

涙川 たぎつ心の 早き瀬を しがらみかけて せく袖ぞなき

(新古今、一一二〇、巻四)

前の歌は、「涙川と申す河はいづくに侍るぞ」という質問の答えであり、「涙」と「袖」との関係を主張していますが、後の歌は、「たぎつ心」という、「涙川」の源も顕示しています。

「たぎつ心」から湧いてくる「涙」が「人の心を種とした」大和の歌の言葉になったのは、当然のように思えます。一方、「心を種とした」歌の言葉であったからこ

そ、「涙」は、悲しみや喜びのような具体的な感情を越えて、感覚的な態度そのものを表徴し、日常的な問題にこだわらず、「生」と「死」、または「愛」と「美」等のような実存的な問題についても語る事ができたのです。

最後になりますが、もう一つの問題について簡単に述べたいと思います。それは、なぜ「涙」こそが「たぎつ心」の声を表すようになったか、という重要な問題です。その理由は、当時の美意識に根を降ろしているので、無常観、もののはれ等の価値観のカテゴリーとも結びかけていますが、ここでは一つの言葉だけを考察してみたいと思います。それは、「なく」という言葉です。

「なく」とは、様々の意味を持っているので、最もよく使われる掛け詞の一つです。歌の中で美化された時鳥、鶯、蛙、鹿、蟬等のすべての生き物が、やはり「なく」のです。従って、自然との調和を守りながら生きていた当時の人間が自分の声も「なきごえ」泣き声」と呼んだとしても不思議ではないでしょう。少なくとも、歌う声は、「なきごえ」という共通の言葉によって表現されたように思えます。歌が人間に限らず、自然の普遍的な行為であったからです。『古今集』の紀貫之の仮名序では、この思想が次のように明示されています。すなわち、

「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言い出だせるなり。花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。」

人間の「泣き声」が他の生き物の「鳴き声」と合流した歌は数多くありますが、その中の二つばかりを挙げたいと思います。

思ひ出でて 恋しきときは 初雁の なきてわたると 人知るらめや

(古今、七三五、大伴黒主)

鹿の音に またうち添へて 鐘の音の 涙言問ふ 暁の空

(『とはがたり』、卷四)

以上は、「涙言問へ」から「涙言問ふ」への道の第一歩を歩んでみましたが、絶え間なく流れて、絶え間なく語る「涙」のストーリーは、終わりはありません。平安朝文化を特徴づける「流れ」の構造の表徴である「涙」は、感覚的な思想や詩的言語に限らず、他の文芸の分野にも及んでいと考えることができます。例えば、平安朝の美意識の独特な表れである書道の連綿体も、その一つであると思います。「袖に墨つく」という言葉が示しているように、「袖の涙」は、紙の上に流

れる墨れる墨と合流して、執筆過程についてさえも色々と教えてくれることができます。和歌から発生した物語や日記文学等における「袖の涙」の機能を追求しつづけると、思いがけない発見ができるかも知れません。

しかし、平安時代とは違って、我々は「袖の広さ」よりも厳しい制限を意識するようになってきました。それは、時間の制限です。そのため、終わりもしない「涙の語り」をテレビの連続ドラマに例えて、「続く」と言って、今日の話の中絶させていただきます。またいつかお逢いできるかも知れない、と期待しています。

発表を終えて

去年の十一月に日文研へ来てから、日文研フォーラムにも何回も参加し

たことがあります。皆さんがよく来て下さることを、いつも不思議に思わざるをえません。今日の真夏の暑さにさえもめげずおみ足をお

運びくださいまして、真にありがたく存じます。このような皆さんの

熱意は、我々、研究者にとつて、極めて大事な刺激になっています。講演が終わった直後に興奮しすぎて、自分の感謝の気持ちをやまく

表せなくて、大変残念に思いましたが、この紙面を借りて、重ねてお礼を申し上げたいと思います。皆さんは、最後まで私と一緒に、

『古今集』と『新古今集』等における「涙」の跡を辿りつづけただけではなく、貴重なコメントさえもして下さったからです。その

コメントの中から私の次の新しい研究テーマも生まれてくるかも知れません。・・・我々現代人は、心を凍らせて生きています。その

寂しさのつれづれに昔の歌と物語を読みながら、その優雅な美と深い意味を再発見し、自分の人生も考え直すことができます。

いや、そぼちぬる袖の海では生き甲斐さえも見つけることができるかも知れません。・・・いずれにしても、今日の「涙」の

話が少しでも真夏の暑さを和らげることができたら、大変嬉しく思います。・・・また「逢はむ日までに」私の

「袖はかはかじ」・・・



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI ßEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	巖 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコワント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラル・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシュ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
48	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 —科举制度をめぐる—」
55	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り — 平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴェン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 - 南蛮美術から洋学まで -」
60	6.1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 - 井上靖文学における『陰謀』 -」
61	6.2.8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 - 俳句の可能性を中心に -」
62	6.3.8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
63	6.4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880~1930」
64	6.5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6.6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験 - 文学における日本人と上海」
66	6.7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見 - 王朝文を中心に -」

67	6.9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
68	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
70	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミターージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミターージュ美術館のコレクションを中心－」
71	7. 2.14 (1995)	嚴 紹 璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」

○は報告書既刊

発行日 1995年2月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合せ先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1994 国際日本文化研究センター

■ 日時

1993年7月13日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

